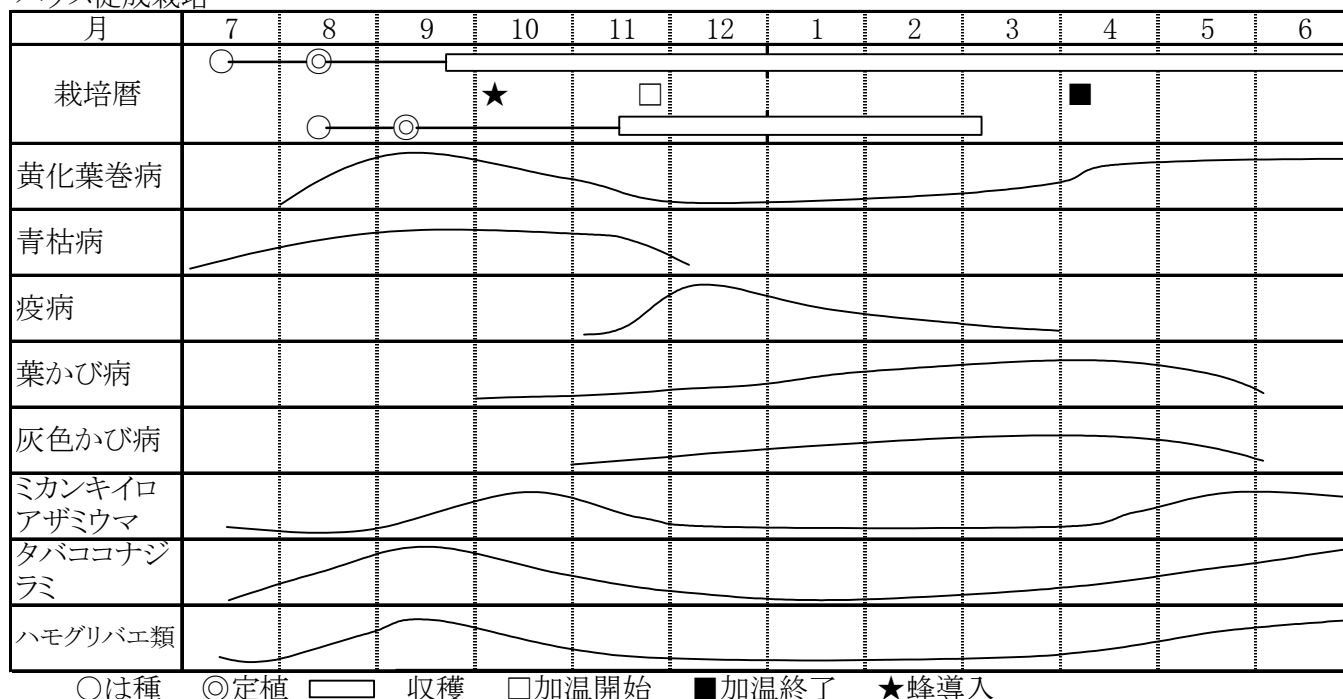


(9) トマト・ミニトマト

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

ハウス促成栽培



2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
モザイク病 (ToMV, TMV, CMV, PVX) 黄化えそ病 (TSWV) 茎えそ病 (CSNV) 黄化葉巻病 (TYLCV) 黄化病 (ToCV)	①虫媒伝染するものは、伝染源となる感染作物、雑草を取り除く。 ②発病株は早期に発見し除去する。疑似症状株は管理作業を最後に行う。 ③ToMV, TMVに対してはTm-2a因子など抵抗性遺伝子を持つものを栽培する。 ④ToMV, TMVについては、土壌伝染するため蒸気による土壌消毒も有効である。 ⑤施設開口部に防虫ネットを設置し、媒介虫の飛来を防止する。 ⑥接触伝染するものは次のことに注意する。 i) 接ぎ木ナイフは消毒したものを使い、連続して使用しない。 ii) 苗床から生育初期にかけて、発病株の早期発見、除去に努める。 iii) 疑似症状株の管理作業は最後に行い、手は石けんでよく洗う。 【参考事項】 モザイク病の病原はトマトモザイクウイルス (ToMV)、タバコモザイクウイルス (TMV)、キュウリモザイクウイルス (CMV)、ジャガイモXウイルス (PVX) である。 黄化えそ病の病原はトマト黄化えそウイルス (TSWV)、茎えそ病の病原はキク茎えそウイルス (CSNV)、黄化葉巻病の病原はトマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV)、黄化病の病原はトマト退緑ウイルス (ToCV) である。   トマト黄化葉巻病 トマト黄化病

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
青枯病 (細菌)	①排水を良好にする。 ②発病株を早期に発見し除去する。 ③整枝、収穫などの作業で感染することもあるので、ハサミを消毒する。 ④耐病性台木に接ぎ木する（接ぎ木する場合は穂木品種（Tm-1型、Tm-2a型）との親和性に注意する）。 なお、高接ぎ木苗（接ぎ木部位：第2、3葉上）の利用により発病抑制効果が高まる。 【参考事項】 高温時に発生が多い。 センチュウ類の加害は発病を助長する。  トマト青枯病
軟腐病 (細菌)	①排水を良好にする。 ②多湿を避ける。 ③発病株を早期に発見し除去する。
かいよう病 (細菌)	①発病株を早期に発見し除去する。 ②摘芽、摘葉などの作業は傷口の乾きやすい時に行う。 ③多湿を避ける。 ④温湯又は乾熱で種子消毒する（野菜種子の消毒の項参照）。 【参考事項】 土壌伝染及び種子伝染する。 傷口から病原菌が侵入する。 摘芽、摘葉、つる下げなどの作業により伝染するので注意する。 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となる。  トマトかいよう病
萎凋病 (Fusarium)	①排水を良好にする。 ②窒素肥料の過用を避ける。 ③発病株を早期に発見し除去する。 ④病原菌のレース（1～3）に合わせた抵抗性品種を栽培する。又は抵抗性台木に接ぎ木する（接ぎ木する場合は穂木品種（Tm-1型、Tm-2a型）との親和性に注意する）。 ⑤施設栽培では太陽熱消毒が有効である。 【参考事項】 トマト萎凋病菌（レース1～3）はいずれもトマトのみを侵す。 センチュウ類の加害は発病を助長する。  トマト萎凋病
根腐萎凋病 (Fusarium)	①土壌の過湿過乾を避ける。 ②窒素肥料の過用を避ける。 ③発病株を早期に発見し除去する。 ④抵抗性品種を栽培する。又は抵抗性台木に接ぎ木する（接ぎ木する場合は、穂木（Tm-1型、Tm-2a型）との親和性に注意する）。 【参考事項】 トマト根腐萎凋病菌は、トマトのみを侵す。 センチュウ類の加害は発病を助長する。  トマト根腐萎凋病

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
半身萎凋病 (<i>Verticillium</i>)	①発病株を早期に発見し除去する。 ②耐病性品種を栽培する。又は抵抗性台木に接ぎ木する（接ぎ木する場合は穂木(Tm-1型、Tm-2a型)との親和性に注意する）。 【参考事項】 本病原菌は多犯性で、トマトのほかナス、イチゴ、ピーマン、フキ、オクラ、キクなどを侵す（ただし、寄生性の分化あり）。 やや冷涼な22～28℃で発生が多い。	 トマト半身萎凋病
褐色根腐病 (<i>Pyrenochaeta</i>)	①残根をできるだけ除去する。 ②窒素肥料の過用を避ける。 ③抵抗性台木に接ぎ木する（接ぎ木する場合は穂木(Tm-1型、Tm-2a型)との親和性に注意する）。 【参考事項】 地温15～18℃前後が発病適温である。	 トマト褐色根腐病
疫病 (<i>Phytophthora</i>)	①換気を良好にし、多湿を避ける。 ②窒素肥料の過用を避ける。 ③発病茎葉を早期に除去する。 ④マルチをする。 【参考事項】 発病適温は20℃前後。 低温多湿条件で発生が多い。 農薬の散布は予防に重点をおく。	 トマト疫病
菌核病 (<i>Sclerotinia</i>)	①密植、過繁茂、多湿を避ける。 ②発病株又は発病部を早期に除去する。 【参考事項】 レタス、キャベツ、キュウリ、ナスなど各種作物を侵すので、他作物からの伝染にも注意する。	
葉かび病 (<i>Fulvia</i>)	①密植、過繁茂を避け、換気を良好にする。 ②多発葉は除去する。 ③肥切れを起こさないよう、適切な肥培管理を行う。 ④乾熱で種子消毒する（野菜種子の消毒の項参照）。 ⑤抵抗性品種（レースにより異なる）を栽培する。 ⑥資材を消毒する 【参考事項】 ハウス栽培で多湿条件で発生が多い。 感染から発病までに約2週間かかる。 葉液は葉裏にも十分かかるよう留意する。	 トマト葉かび病

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
すすかび病 (<i>Pseudocercospora</i>)	①密植、過繁茂を避け、換気を良好にする。 ②発病葉や被害残さは施設外に持ち出し適切に処分する。 【参考事項】 病徴は葉かび病と似るが、顕微鏡で分生子の形状を見ると葉かび病菌では楕円や樽型で、本病菌ではムチ状又は円筒形である。 発病適温は18～28℃であるが高温ほど発病しやすい。葉かび病の発病適温よりもやや高く、真夏から秋にかけての発生が多い。 感染から発病までに2週間以上かかり、低温時では3週間以上かかる。	 被害葉
輪紋病 (<i>Alternaria</i>)	①多湿を避ける。 ②肥料切れを起こさないよう、適切な肥培管理を行う。 【参考事項】 多湿条件で発生が多い。	
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①換気を良好にし、多湿を避ける。 ②発病部及び枯葉を除去する。 ③全面にポリマルチをする。 ④施設栽培では保温に努める。 【参考事項】 施設栽培では加温時間を短縮すると多湿となり、本病が多発するので無理な短縮は避ける。 発病適温は15～23℃で、湿度が高いと病勢進展は著しい。曇雨天が続くと多発する傾向がある。	 トマト灰色かび病
ミカンキイロアザミウマ	①施設周辺の除草をする。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ③マルチ栽培は土中での蛹化防止に効果がある。 ④発生施設では収穫終了後密閉し、高温にして殺虫する。 【参考事項】 本種が花の子房に産卵すると、果実に白ぶくれ症が発生する。葉では葉脈間が食害され白斑を生じる。 本種は寄主範囲が広い。 耐寒性が強く、野外でも雑草などで越冬する。 トマト黄化えそウイルス (TSWV) やキク茎えそウイルス (CSNV) を媒介する。 マルハナバチを導入する場合、農薬の使用に当たってはハチに対する影響に注意する。	
コナジラミ類	①施設周辺の雑草を除草する。 ②施設開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防止する。 ③無寄生苗を定植する。 ④発生施設では収穫終了後密閉し、高温にして殺虫する。 【参考事項】 オンシツコナジラミとタバココナジラミが寄生し、排泄物によりすす病が発生する。 タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV)、コナジラミ類はトマト退緑ウイルス (ToCV) を媒介する。 施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵が定着できるよう長期間悪影響を及ぼす農薬は使用しない。 タバココナジラミは薬剤感受性などが異なるバイオタイプが存在し、遺伝子診断のみで識別可能である。 マルハナバチを導入する場合、農薬の使用に当たってはハチに対する影響に注意する。	

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
ハモグリバエ類 (マメハモグリバエ、トマトハモグリバエ、ナスハモグリバエ)	①施設開口部に目合い1 mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防止する。 ②無寄生苗を定植する。 ③本種が寄生した葉を下葉かきなどで除去した場合、残さは施設内に放置しない。 【参考事項】 幼虫が葉内を穿孔加害して不規則な線状の被害痕を残す。成熟した幼虫は葉を脱出して主に土壌間隙で蛹化する。雌成虫は産卵管で葉表に小さな穴をあけ産卵する。 寄生範囲はきわめて広い。 マルハナバチを導入する場合、農薬の使用に当たってはハチに対する影響に注意する。
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリア・スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールドなどが有効 ②太陽熱消毒を行う (土壌病害虫の防除法の項参照)。 ③有機物を施用する。 【参考事項】 トマトではネコブセンチュウによる被害が大きい。 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。